

# 黄金風景

太宰治

青空文庫



海の岸辺に緑なす檜かしの木、その檜の木に黄金の細き鎖のむすばれて

—プウシキン—

私は子供のときには、余り質たちのいい方ではなかった。女中をいじめた。私は、のろくさいことは嫌きらいで、それゆえ、のろくさい女中を殊ことにもいじめた。お慶は、のろくさい女中である。林檎りんごの皮をむかせても、むきながら何を考かんえているのか、二度も三度も手を休めて、おい、とその度毎にきびしく声を掛けてやらないと、片手に林檎、片手にナイフを持つたまま、いつまでも、ぼんやりしているのだ。足りないのではないか、と思われた。台所で、何もせず、ただのつそりつつ立たっている姿を、私はよく見かけたものであるが、子供心にも、うすみつともなく、妙まに疝かんにさわって、おい、お慶、日は短いのだぞ、などと大人びた、いま思おもつても脊筋せすじの寒さくなるような非道の言葉を投げつけて、それで足りずに一度はお慶をよびつけ、私の絵本の観兵式の何百人となくうよしている兵隊、馬に乗のっている者もあり、旗持はたかっている者もあり、銃担にっている者もあり、そのひとりひとり兵隊の形を缺はさまりでもって切り抜かせ、不器用なお慶は、朝から昼飯も食わず日暮頃までか

かつて、やつと三十人くらい、それも大将の鬚を片方切り落したり、銃持つ兵隊の手を、熊の手みたいに恐ろしく大きく切り抜いたり、そうしていちいち私に怒鳴られ、夏のころであつた、お慶は汗かきなので、切り抜かれた兵隊たちはみんな、お慶の手の汗で、びしよびしよ濡れて、私は遂に痲癩をおこし、お慶を蹴つた。たしかに肩を蹴つた筈なのに、お慶は右の頬をおさえ、がばと泣き伏し、泣き泣きいった。「親にさえ顔を踏まれたことはない。一生おぼえております」うめくような口調で、とぎれ、とぎれそういったので、私は、流石にいやな気がした。そのほかにも、私はほとんどそれが天命でもあるかのように、お慶をいびつた。いまでも、多少はそうであるが、私には無智な魯鈍の者は、とても堪忍できぬのだ。

一昨年、私は家を追われ、一夜のうちに窮迫し、巷をさまよい、諸所に泣きつき、その日その日のいのち繋ぎ、やや文筆でもって、自活できるあてがつきはじめたと思つたとたん、病を得た。ひとびとの情で一夏、千葉県船橋町、泥の海のすぐ近くに小さい家を借り、自炊の保養をすることができ、毎夜毎夜、寝巻をしぼる程の寝汗とたたかい、それでも仕事はしなければならず、毎朝々々のつめたい一合の牛乳だけが、ただそれだけが、奇妙に生きているよろこびとして感じられ、庭の隅の夾竹桃の花が咲いたのを、めらめら火

が燃えているようにしか感じられなかったほど、私の頭もほとんど痛み疲れていた。

そのころのこと、戸籍調べの四十に近い、痩せて小柄のお巡りが玄関で、帳簿の私の名前と、それから無精髯ぶしようひげのぼし放題の私の顔とを、つくづく見比べ、おや、あなたは……のお坊ちゃんじゃございませんか？ そう言うお巡りのことには、強い故郷の訛なまりがあったので、「そうです」私はふてぶてしく答えた。「あなたは？」

お巡りは痩せた顔にくるしいばかりにいつぱいの笑をたたえて、

「やあ。やはりそうでしたか。お忘れかもしれないけれど、かれこれ二十年ちかくまえ、私はKで馬車やをしていました」

Kとは、私の生れた村の名前である。

「ごらんの通り」私は、にこりともせずに応じた。「私も、いまは落ちぶれました」

「とんでもない」お巡りは、なおも楽しげに笑いながら、「小説をお書きなさるんだっから、それはなかなか出世です」

私は苦笑した。

「ところで」とお巡りは少し声をひくめ、「お慶がいつもあなたのお噂うわさをしています」

「おけい？」すぐには呑みこめなかった。

「お慶ですよ。お忘れでしょう。お宅の女中をしていた——」

思い出した。ああ、と思わずうめいて、私は玄関の式台にしゃがんだまま、頭をたれて、その二十年まえ、のろくさかつたひとりの女中に対しての私の悪行が、ひとつひとつ、はつきり思い出され、ほとんど座に耐えかねた。

「幸福ですか？」ふと顔をあげてそんな突拍子ない質問を発する私のかおは、たしかに罪人、被告、卑屈な笑いをさえ浮べていたと記憶する。

「ええ、もう、どうやら」くつたくなく、そうほがらかに答えて、お巡りはハンケチで額の汗をぬぐって、「かまいませんでしょうか。こんどあれを連れて、いちどゆっくりお礼にあがりましょう」

私は飛び上るほど、ぎよつとした。いいえ、もう、それには、とはげしく拒否して、私は言い知れぬ屈辱感に身悶みもだえしていた。

けれども、お巡りは、朗かだった。

「子供がねえ、あなた、ここの駅につとめるようになりましてな、それが長男です。それから男、女、女、その末のが八つでことし小学校にあがりました。もう一安心。お慶も苦労いたしました。なんとというか、まあ、お宅のような大家にあがって行儀見習いした者は、

やはりどこか、ちがいましたな」すこし顔を赤くして笑い、「おかげさまでした。お慶も、あなたのお噂、しじゅうして居ります。こんどの公休には、きつと一緒にお礼にあげます」急に真面目な顔になつて、「それじゃ、きようは失礼いたします。お大事に」

それから、三日たつて、私が仕事のことよりも、金銭のことで思い悩み、うちにじつとして居れなくて、竹のステッキ持つて、海へ出ようと、玄關の戸をがらがらあけたら、外に三人、浴衣着た父と母と、赤い洋服着た女の子と、絵のように美しく並んで立っていた。お慶の家族である。

私は自分でも意外なほどの、おそろしく大きな怒声を発した。

「来たのですか。きよう、私これから用事があつて出かけなければなりません。お気の毒ですが、またの日においで下さい」

お慶は、品のいい中年の奥さんになつていた。八つの子は、女中のころのお慶によく似た顔をしていて、うすのろらしい濁つた眼でぼんやり私を見上げていた。私はかなしく、お慶がまだひとことも言い出さぬうち、逃げるように、海浜へ飛び出した。竹のステッキで、海浜の雑草を薙ぎ払い薙ぎ払い、いちどもあとを振りかえらず、一步、一步、地団駄踏むような荒んだ歩きかたで、とにかく海岸伝いに町の方へ、まっすぐに歩いた。私は町

で何をしていたろう。ただ意味もなく、活動小屋の絵看板見あげたり、呉服屋の飾窓を見つめたり、ちえつちえつと舌打ちしては、心のどこかの隅で、負けた、負けた、と囁く声ささやが聞えて、これはならぬと烈はげしくからだをゆすぶっては、また歩き、三十分ほどそうしていたろうか、私はふたたび私の家へとつて返した。

うみぎしに出て、私は立止った。見よ、前方に平和の図がある。お慶親子三人、のどかに海に石の投げっこしては笑い興じている。声がここまで聞えて来る。

「なかなか」お巡りは、うんと力こめて石をほうって、「頭のよさそうな方じゃないか。あのひとは、いまに偉くなるぞ」

「そうですとも、そうですとも」お慶の誇らしげな高い声である。「あのかたは、お小さいときからひとり変つて居られた。目下のものにもそれは親切に、目をかけて下すつた」私は立ったまま泣いていた。けわしい興奮が、涙で、まるで気持よく溶け去ってしまうのだ。

負けた。これは、いいことだ。そうなければ、いけないのだ。かれらの勝利は、また私のおあすの出発にも、光を与える。







# 青空文庫情報

底本：「きりぎりす」新潮文庫、新潮社

1974（昭和49）年9月30日発行

1988（昭和63）年3月15日29刷改版

1996（平成8）年9月25日46刷

初出：「国民新聞」

1939（昭和14）年3月

入力：深水英一郎・加藤るみ

校正：加藤るみ

1999年1月1日公開

2004年3月4日修正

※「日本文学(e-text)全集」作成ファイル

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです

# 黄金風景

太宰治

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>